

2015年『夜の寝覚』現代語訳

をばすて やま



さすがに姨捨山の月は、

そうはいつもやはり、(月の名所)姨捨山(のように風情のある広沢)の月は(私の心を慰めかねるが)、
ふ

夜更くるままに澄みまさるを、めづらしく、
夜が更ける につれて 清らかな明るさが増すのを、(女君は)素晴らしい(とお思いになり)、

つぐづく見いだしたまひて、ながめいりたまふ。
しみじみと 屋内からご覧になって、
すっかりもの思いにふけなさる。

アありしにもあらず、うき世にすむ月の

以前(の境遇)とも違つて、(私は)つらいこの世に住んでいる。(しかし、)澄んでる月の

影こそ見しにかはらざりけれ
光は(以前に)見たのと比べて、変わらないなあ。

そのままに手ふれたまはざりける箏の琴ひきよせ
(女君は)久しくそのままで、手を触れなさらなかつた
箏の琴を 引き寄せ

たまひて、かき鳴らしたまふに、所からあはれ
なさつて、 弾き鳴らし なさると、 さう こと

まさり、松風もいと吹きあはせたるに、そそのかされ
まさり、 松風もとでも(素晴らしく琴と)合わせて吹いてるので、 その気にさせられて、
自然としみじみと心動くようにお思いになるのにまかせて、

て、ものあはれに思さるるままに、
おぼ

ひ

聞く人あらじと思せば心やすく、手のかぎり彈き
(この演奏を)聞く人もいないだらう」とお思いになると安心して、 琴の弾き方(の手法)を出し尽くして

たまひたるに、
弾きなさつてはいる、

入道殿の、仮の御前におはしけるに、聞きたまひて、
(父)入道殿が、 仮壇の前に
いらっしゃったときに、 (女君の演奏を)聞きなさつて

ね

「あはれに、言ふにもあまる御琴の音かな」と、「しみじみと心を動かされる、言葉では言い尽くせない（ほど美しい）女君の琴の音色だなあ」と、美しさに、（その場で）聞いて（いるだけではいられないほど）度が過ぎて、仏道修行を途中でやめてわたりたまひたれば、弾きやみたまひぬるを、
（女君の元に）お越しになつたので、（女君が）演奏を止めてしまったのを、（入道は女君に）

「なほあそばせ。念佛しはべるに、『極樂の迎へちかき
まだ(止めずに)お弾きください。念佛を唱えておりますと、
『極樂浄土への迎えが 近いのか』

か』と、心ときめきせられて、たづねまうで来つるぞ
と(不安で)胸がときどきして
捜し求めて 参上したのだよ

や」とて、少将に和琴たまはせ、琴かき合せなどと云つて、少将〔＝女君の乳母の娘〕に和琴をお与えになり、琴の合奏などを

したまひて遊びたまひ程に、はかなく夜もあけぬ。
なさつて
管絃の遊びをなさるうちに、
あつけなくも
夜も明けてしまつた。

かやうに心なぐやむつゝ、あかし暮らしたまゝ。
日々を過ぎしなやる。

つねよりも時雨あかしたるつとめて、大納言殿

より、

ウ
つらけれど思ひやるかな山里の

(あなたは私に) 冷淡だけれども、(私はあなたに) 思いを馳せることだなあ。山里の
よ よ
おと

**夜中の
夜半のしぐれの音はいかにと
時雨の
音はどのようかと思って。**

雪かき暮らしたる日、思ひいでなきふれやとの空
(良い)思い出がない
故郷〔=都〕の空

雪で辺りが暗くなっている日、
かき暮らした。思っても
(良い)思い出がない

故郷「二都」の空

さへ、どぢたる心地して、さすがに心ぼそければ、
までも、（雪で）閉じている気がして、

そつはいつてもやはり不安なので、

はし

端ちかくゐざりいでて、白き御衣どもあまた、

縁側近くに

膝行して出てきて、

白い御衣を

たくさん（重ね着していく）、

なかなかいろいろならむよりもをかしく、なつかし
様々（な色の重ね着）よりもかえつて

趣深く、

ことさら心惹かれる

げに着なしたまひて、ながめ暮らしたまふ。

感じにお召しになつて、

もの思ひにふけつてお暮しになる。

ひとつせ、かやうなりしに、大納言の上と端ちかく

昨年、このように（大雪）になつた時に、（姉である）大納言の上と

縁側近くで、

て、雪山を造らせて見しほどなど、思しいづるに、

（一緒に）見た時のことなどを、思い出すと、

つねよりも落つる涙を、らうたげに拭ひかくして、

いつもよりもこぼれる涙を、

可愛らしい様子で

拭つて

隠して、

「思ひいではあらしの山になぐさまで

「（都に良い）思い出はないだろに、嵐山（の近くの広沢）で（も）気持ちは晴れないで、

オ雪ふるさ」とはなほぞこひしき

雪が降る故郷の都は、

やはり

恋しい。

「我をば、かくも思しいでじかし」と、推しはかり

（姉は）私を、このようにも思い出しなされないでしょう」と、

推測する

ごとにさへ止めがたきを、

ことに、（涙を）止めるのが難しい（様子）のを、（女君の母親代わりの）

とど

対の君かいと心ぐるしく見たてまつりて、

対の君は

とても 気の毒に

見申し上げて、

「くるしく、今までながめさせたまふかな。

「つら」（状態で）、今まで

もの思いにふけつていらっしゃるなあ。

御前に人々参りたまへ」など、

女君の前に 皆さん 参上なさってください」など、

(女君を元気つけるために、)

キ ようづ思ひいれず顔にもてなし、
何事につけても 深刻に考えない 様子に 振舞つて、

なぐさめたてまつる。

慰め

申し上げる。